

特別講演

「21世紀型子育てを模索する」

—現代は本当に親子の危機か?—

宮本 まき子 (エッセイスト・家族カウンセラー)

I. 日本の「家族概念」が変わり、サザエさん
家族は過去のものに

社会の急速な変化につれ現代人の家族概念も大きく変わった。家族数の減少は「話す、論じる、わかりあう」というごく普通のコミュニケーション能力の習得さえ難しくし、パソコンや携帯電話によるメール会話が拍車をかけている。食事中や家族団らんの時間帯にはケータイの電源を切ってと注意する時代になったのである。

家庭内で共同作業をしたり、家族で生活用具を共有する、分け合うというライフスタイルも減少した。個室があり、こだわりの生活用品を各自でそろえ、「各人好きな時間帯にお好みメニュー」がついて家庭の「ホテル化」が急増している。家族に衣食住を提供し、外部との社交生活を持ち、老人や病人などの弱者をケアし、子どもを養育して自立させる機能はあれよあれよという間に家庭から消滅してしまった。いまやスーパーやコンビニ、ファースト・フードやファミレス、病院や介護施設、学校や塾があれば事足りる。家庭は「生活の場」から「究極の癒し空間」となったのである。三世代でワイワイにぎやかに団らんしたりケンカしたりモメたり和解したりアドバイスしたりといった、なんともアナログな「サザエさんの家庭」はいまや幻想となったのである。

中でもマイホームやニュー・ファミリーをめざした熟年、団塊の世代は「巣作り」にこだわって「外部者シャットアウト」のまゆごもり家庭をめざしたフシがある。ストレス回避と称して「閉じた家庭」はさまざまな問題を生み出して

いった。子どもが本来、素顔で安心してホンネで暮らせるはずの家庭は、暗黙の了解で家族同士でもモメない、悩まないをモットーとする無風地帯となったのである。一見「いい家族」は単に大人の葛藤回避に子どもが「合わせて」いることが多い。裏返せば「自立した大人になって社会に出て、知己や愛する人と出会い、そこそこの充実感・満足感を持って生き抜く」ことを家庭で学べない未成熟人を大量に生み出したようだ。

II. 一見仲良く親子、実は他人行儀のディスプレイ家族という危機

熟年、団塊の世代のこの家族ルールは今も継続中だ。

- 1) 親は無風地帯での穏やかな生活に適応し、家庭内でのわずらわしさを先送りするか無視する傾向にある。
- 2) ディスプレイ家族やイベント家族に徹し、他者がみて「いい家庭」や楽しいことにエネルギーを注ぎたがる。
- 3) 家庭内で「いい子」が家庭外に濃密な人間関係を求めて、学級崩壊やいじめ、ストーカー行為に及ぶケースが増えている。この場合、親子関係のほうが他人行儀なのだという事実を親は理解できないし、認めようとしない。成育初期段階でのコミュニケーションレス環境は年齢が上がると共に複雑になる人間関係に対応する能力を育てなかつた。その結果自主的ひきこもりやたじろいでしまうニートを多数出現させたと推測される。2006年度のデータによれば「ニート本人と家族の関係はよい」と答え

たのが61%, 家庭の経済事情は「普通以上か裕福」と答えたのが80%もいた。「いい家庭」を目指した子育てが必ずしも子どものためにならなかった証明ではなかろうか?

ニート本人が今望むことは

- 1) 家から出て自立する訓練……………60.2%
- 2) じっくり話を聞いて力づけてくれる人…
41.7%
- 3) 適性にあう仕事についての相談……33%

本来なら家庭や家族がしっちゃんかめっちゃんになりながら子育てのプロセスで果たしていた機能である。それを親たちには求めず、他人に期待するのは皮肉である。このような家族間でのコミュニケーションレスを「孤独」だと感じる世代は50代以上に多く、「マイペース、きままでもいい」と感じるのは40代以下に多い。ところで「家族間で」、「家族なんだから」という言葉の解釈をするとき、「温かい」、「わずらわしい」、「面倒」、「大事なもの」、「うざい」、「重い」といった世代間の温度差やギャップがあることを知っておかねばなるまい。

Ⅲ. 二世帯育児のススメ・祖父母は直接かかわろう

大学生250人のレポートと、公民館主催の40歳女性向けの講座受講生120人のアンケートから次のような世代別の概念の差がみられた。50代以上の母親は結婚によって自分は婚家に溶け込もうという同姓一族意識がある。40代以下の母親の場合、結婚は個と個のドッキングであり、「自分は自分」という観念は揺らがない。ゆえに40代以下の家族の概念の多くは「私」につながる血族と思われる。40歳前後の女性120人に「これぞ家族」という順位をつけさせたところ、1位子ども、2位夫あるいは実親、3位実親あるいは夫、4位実の兄弟姉妹あるいは実の祖父母、5位舅姑であった。50代以上の女性の回答にある「6位夫の兄弟姉妹、夫の祖父母」を加えた人は皆無であった。30代～40代の女性で「夫婦は一心同体」と思う人は17～18%にすぎない。また母子のつながりは強いが、「夫婦一体、家族一丸」という連帯感は薄れている。よって「子育てに家族の協力を」と言った場合も非常に狭い範囲の人間関係でしか発想されていないと思われる。小さな家族で、外部から閉じられた家

庭では次のようなことがおきている。

- ・大人と子どもの世代間境界があいまいかバリアフリーになり、長幼の序がなくなって「友だち親子」が出現した。
- ・親が子に教えるものが自立に必要な知恵・知識・技量より、抜け道や近道、地下道となった。これは一種のカンニングである。
- ・相互不干渉、自由尊重という名目の「育児放棄」が増加した。

子育てのポイントも社会と共に変遷している。40年前には病気予防や栄養学が、20年前には発達障害や社会適応、母子関係がメインテーマだったのが、現在では情報過多への対応や、コミュニケーションレスの予防や負け組回避のための早期教育、子どものペット化などの大人社会と直結したものになっている。変化の流れを変えることは難しいが、閉じられた家庭カプセルから子どもを取り出して多くの人たち、それもさまざまな世代や立場の人たちとどんどん接触させ、共に暮らす工夫がもっとなされてよいだろう。

コミュニケーションするには頭数が必要なのである。その頭数に身近な人材を活用しよう。今思い返せば熟年世代が文化伝承をサボって自分たちの都合で家庭改造をやったツケが来たのである。団塊の世代は勝手に定年後を趣味や遊びで自己完結せずに、団塊ジュニアに伝えそびれたことを孫世代に伝えようという使命感を持つべきである。伝えそびれたことの最たるものは次の3つである。

- 1) サバイバル力…どんな状況下でも自力で生き抜くたくましさ、知恵、技量、コミュニケーション力などを身につける。
- 2) 自尊心を持つ…自分を他者と比較するのはよくない。フェアで誠実で正直であることを自ら誇る心を持つ。
- 3) 長幼の序…世代間境界を自覚する。社会には多様な人々がいるという自覚を持つ。グローバルなモラル感覚を持つ。

Ⅳ. 社会全体で関わる子育てで親子の危機は脱する

祖父母の孫育ては「血縁関係」だけでなく、孫世代と呼べる子ども全体に関わって欲しい。それも教育するとかシツケをするといった上意

伝達式の関わり方ではなく、自身の成育過程で大人たちから教わったことをそのまま再現するのである。「もったいない」という観念だけでも山ほどあるし、「恥の概念」も同様だろう。七輪で火をおこし、生水は煮沸してから飲むことや、星座や太陽の位置で方角を知るなどのサバイバル知識や肥後刀や針の使い方を教えてもいい。ともかく毎日少しの時間でも子どもたちと昔風の生活を一緒にすれば自然に覚えていくはずだ。ある大学生がこの文化伝承の一案として「1人の保母が3人の子どもをみるのではなく、1人の子どもに3人のジジ・ババをつけておけば3人分の知恵が伝わる」と言ったが名案である。50代以上の世代はともかく、電気とケータイがなくなったら生きていけないようでは民族存亡の危機といえるだろう。

また、子どもらは親と教師以外の「大人モデル」を渴望しているのも事実だ。偉人伝でもなく、特別な才能でもなく、平々凡々と暮らしてきた人たちが長い人生で何を悩み、どんな乗り切り方をして、どのような幸せを感じてきたのかを等身大の話として聞きたいのである。かつて親類や地域のおじさん、おばさんがやってくれたことをお返しするつもりで中高年世代はが

んばらなければいけない。

特に小学校高学年から始まるギャングエイジは「第二反抗期」というより仲間意識の形成と親からの心理的分離のための発達段階とみるほうが妥当と思われる。現に600人弱の大学生対象のアンケートでも92~95%が「遊び気分でその時期に群れて悪さをした」と答えている。これを親や教師や周辺の大人たちが毅然としてはね付け、挫折させ、叱り飛ばして子どもに社会の厳しさを体得させていた。

10年前の親にくらべ、現代の親世代は葛藤回避やコミュニケーションレスの傾向が強まっていると思われるので、いっそうの第三者からの子どもたちへの直の働きかけや接触、交流が望まれる。

出 典

- 1) 読売新聞 2006年4月 2万人対象ニート調査
- 2) 久芳美恵子著 三省堂 教師のための教育相談の基礎
- 3) 宮本まき子著 東京新聞出版局 熟年離婚より孫育て
- 4) NHK「家族についての世論調査 1997」